

## 世界の労働関係研究所・資料館・ 図書館(8)

フィンランド・タンペレで開かれた労働史研究機関国際協会大会(その1)

五十嵐 仁

---

### はじめに

2001年9月6～8日、フィンランド南部の工業都市・タンペレ<sup>(1)</sup>で、IALHI(労働史研究機関国際協会International Association of Labour History Institutions)の第32回大会が開催された<sup>(2)</sup>。私がフィンランドにやってきた目的の一つは、この大会に出席することだった。

この時期にこの場所でこの大会が開かれるということをウェブ・サイトで知った私は、早速、研究所に連絡して参加の申し込みをすることにした。大原社研は、日本でただ一つ、この国際機関のメンバーになっていたからである。

この大会は、私にとっては、大原社研に似通った世界中の労働関係研究所の現状を知る上で絶好のチャンスだった。と同時に、これから訪問しようと思っている各地の研究所や文書館・資料館の関係者と直に知り合う、またとない機会である。

英語が良くできないとか、初めて会うとか、腰が痛いとか(前回書いたように腰痛がぶり返していた)、四の五の言っている場合ではなか

った。ここは当たって砕けるの精神で(本当に砕けてしまっては困るが)、フィンランドの首都ヘルシンキの中央駅から北に向かって列車に乗り込んだ。

というわけで、今回と次回の2回に分けて、フィンランド第2の工業都市・タンペレで開かれたIALHI年次大会の様子について報告することにしよう。

### パスの間違い

列車は「森と湖の国」フィンランドの田舎を走り抜け、どうにかこうにかタンペレの駅に着いた。しかし、ここでまたしても大失敗をしてしまった。このときの列車の旅は、3カ月間のユーレイルパスの使い初めだったが、イギリスに行ってから使用するブリットレイルパスを取り違えて車掌に出してしまい、検札の判子を前者ではなく後者に押しもらったからだ。

これでは、この日から使用開始になるはずのユーレイルパスではなく、まだ使わないブリットレイルパスが使用されたことになってしまった。二枚のパスは良く似ている。それを一緒に持っていたのが間違いの元だった。

---

(1) タンペレ市観光局の英語版ウェブサイトについては、<http://www.tampere.fi/matkailu/english/index.htm>を参照。

(2) この大会のプログラムについては、[http://www.tkm.fi/ialhi\\_program.htm](http://www.tkm.fi/ialhi_program.htm)を参照。

私も気が付かなかったが、発券した係員も、それに検札の印を押した車掌も気が付かなかった。幸い、パスを取り違えたことは、列車を降りたタンペレの駅で気が付いた。ここのチケットカウンターで、使用開始の日付と効力が終了する予定の日付を書き込み、スタンプを押してもらった必要があるからだ。

持っていたパスがユーレイルパスではないことが分かり、いざそれを取り出そうとしたら、今度はユーレイルパスが見つからない。「ユーレイルパスがユーレイパスになってしまった」などと洒落ている場合じゃない。青くなってしまった。

チケットカウンターの前で荷物を出して捜してみたが、どこにもない。「まさか、使う前に無くしたんじゃない？」そんなバカな。と、その時、腰のウエストポーチに気が付いた。そう言えば、ヘルシンキの駅でここに入れたような気がする。

捜してみたら、そこにあった。そのとき、突然、思い出した。ヘルシンキの駅で切符を買うとき、このユーレイルパスにパスポート番号を記入する必要があることに気づき、それを書いているときに私の番号になり、慌ててカウンターに向かい、その時、何気なくウエストポーチにしまったということをして……。

パスが見つかってホッとした。でも、間違っただけで使い始めたことをどう訂正したらいいのだろうか。カウンターに行って、事情を説明した。係員は、首を傾げてジッとブリットレイルパスを眺めている。このようなことは初めてなんだろう。どうしたら良いか、考えているようだ。

私は、「ユーレイルパスと間違えてスタンプしてしまったことを、裏に書いてくれませんか」と言った。そこに、この駅のスタンプを押せば何とか説明できるのではないかと思ったわけだ。係員は、事情を書いてスタンプを押し、自

分のサインもしてくれた。これで大丈夫、だと思ふ。多分。

でも、ブリットレイルパスを使い始めるとき、この事情をまた説明しなければならない。イギリスの駅員は分かってくれるだろうか？

まあ、今から考えるのは止めよう。行ってみなければ分からないし、説明してみなければ分からない。スカーレット・オハラじゃないが、「明日になれば、明日の風が吹く」わけだし……。「当たって砕けず」の精神で、ぶつかっていくしかない。

### タンペレの町

さて、こうして何とかタンペレに到着したものの、またも雨だ。アメリカを出てから全く降らなかった日は一度もない。今日は、こちらに来てからずっと降っている。

タンペレはヘルシンキの北西173kmに位置している。1779年10月、グスタフ 世によって開かれた工業都市でフィンランド第2の人口を持つ。といっても約23万人人だというから少ないものだ。

1821年にこの地に紡績工場ができたのが、フィンランドにおける近代工業の始まりだという。19世紀の末にはフィンランド最大の工業都市になった。中心部にはまだ古い煙突が残っており、独特の景観を形作っている。



大きな煙突のあるタンペレの街並み

また、タンペレはナシ湖とピュハ湖という二つの湖に囲まれた地峡であり、水運や商業も盛んだ。産業が盛んだということは働く人が多いということで、当然、労働運動も活発になる。

今回、IALHIの大会がこの地で開かれたのには、それなりの理由があったというわけだ。もう一つ、ここにある中央労働博物館Central Museum of Labour<sup>(3)</sup>が移転（といっても向かい側の建物に移っただけのようだが）し、「新装開店」するのにあわせてイベントを行うという理由もあったようだ。

なお、タンペレ市立美術館にはムーミン谷博物館がある。是非、行って見たかったのだが、時間がとれず、訪問する機会がなかった。残念。

## 大会の受付

このIALHI大会の受付で、早速、重要な出会いがあった。ノルウェーのオスロから来た労働運動資料・文書館のメンバーに会ったからだ。ここには、すでにEメールを送って訪問の希望を伝え、「一般に開放されていますので、いつでもどうぞ。詳しい話は、IALHIの会議でできるでしょう。私たちも行きますから」という返信をもらっていた。

このメールを返してくれた人とその上司である所長、それに秘書の3人が来ていて、私が送ったメールを覚えていてくれた。話をして「まだオスロでのホテルを決めていない」というと、「探してみようか？」と仰る。もちろん探すのは所長さんではなく、その秘書の方である。オスロに滞在する日にちを確かめられたから、これは期待できる。

もし決まれば、大助かりだ。実はこのような

こともあるかと思い、宿を決めなかったのだ。世の中には、上手くいかないこともあるが、上手くいくこともある。これまで上手くいかないことばかりだったので、これからは少し取り返せるのではないかと期待している。

もう一人、フィンランド労働資料館からきていたマーヤリーサ・ヘンティーレMarjaliisa Hentilaという人とも話をした。「昨日SAKに行ったら、彼を知っているという。」

この人は、明後日の午前中、フィンランド労働運動史について講義する予定のセッポ・ヘンティーレSeppo Hentilaヘルシンキ大学教授の奥さんだ。そして思いがけないことを言う。「それなら、私の所にも来れば良かったのに」と……。

あのSAK本部前の朝市が開かれていた広場を取り囲むように、労働資料館や社会民主党の本部など、関連する施設があったのだそう。知らなかった。確かにマークさんに聞かなかったのは迂闊だったが、教えてくれて良かっただろうに、と思った。

SAK訪問の後、時間がなかったわけではない。もし教えてもらってあればこれらの施設のいくつかを訪問できたのだが、残念ながら事前調査がそこまで及ばなかった。もう一度ヘルシンキに戻るが、すぐにストックホルムに向かって旅立たなければならない。立ち寄っている時間はないだろう。

また、短時間だったが、イギリスのマンチェスターにある労働組合資料館からきた人とも話をした。日本から行った何人かの研究者とも知り合いのようで、早速、マンチェスターに来るようにと誘われた。

(3) 中央労働博物館のサイトについては、<http://www.tkm.fi/englanti.htm>を参照。ただし、英語版はフロント・ページだけで、中に何が書かれているのかよく分からない。

この場で受付を済ませたのは20人ほどだっただろうか。皆知り合いのようで、久闊を叙するという風情だ。全く知り合いがないのは、多分、私一人だろう。でも、そんな私にも、参加者の皆さんは気軽に声をかけてくれる。

明日から3日間、私もできるだけ多くの人と知り合いになろうと思う。何といても、私の知名度はゼロだが、「Ohara Institute」の名前は抜群の知名度を持っているのだから……。

今日会った方はいずれもOhara研究所をご存知だった。それにあとの2人は、「以前日本からも来ていたけど……。何て言ったかなあの方は?」「二村先生ですか?」「そうそう」という具合に、二村先生についても覚えておられた。私もその域に一步でも二歩でも近づいていきたいものだ。「ハイ、ジン」と、気軽に声をかけられるような関係に……。

大会の受付に出かける前、久しぶりにネクタイを締めた。この一年間ほとんど締めたことがなかったので、最初、少し考えた。締め方を思い出していたわけだ。このためにわざわざ持ってきたネクタイである。締めないわけにはいかないだろう。

それに、久しぶりにビールを飲んだ。こちらに来てから初めてだ。といってもまだ5日だが、私にとっては長い時間だった。腰が痛いことを、コロッと忘れていた。痛み止めの薬が効いているのか、昨日よりは多少楽だ。この調子なら、何とかしのげるかもしれない。

### 大会第1日(9月6日)

いよいよ、IALHI大会第1日の始まりだ。会議は今日から3日間続く。用意されているコーヒーを飲んで会場に入ると、40~50人の人がいる。隣に座った人に名刺を渡して自己紹介した。

すると、意外な答えが返ってきた。「おはよ

うございます。」何と日本語である。「エッ?」ここで日本人に会うとは思っていなかったから、虚をつかれた。「日本の方ですか?」

話を伺うと、島根県立大学の先生で、タンペレ大学で勉強され、夏休みを利用してこちらで結婚されたパートナーの実家に「里帰り」されているのだそうだ。驚いた。

さて、議事に入って直ぐ、会場である中央労働博物館の見学ツアーを行うという。準備の都合上、日程が変わったようだ。



準備中の会場で説明を聞く参加者

この博物館は、まだ展示の準備中だが、かなりの広さがある。財政の80%が国から援助されるということで、羨ましい限りだ。将来、書庫になる場所なども見せていただいたが、まだ書庫自体も一部しか入っていない。ガラーンとしていて、それだけに余計、広さが目立つ。

その後、仕事道具などが保管されている倉庫のような場所にも案内された。ダンボールに入った「現物資料」が並んでいる。ここは「労働運動」資料館ではなく「労働」資料館だから、運動に関連するものだけでなく、労働者の仕事や生活に関連する資料も集められ、展示されることになっている。

ちなみに、ここの名称に「中央Central」と付いているのは、フィンランド内の労働関係資料館の中でセンター的な役割を果たすからだろう。「センター」が首都のヘルシンキになく

地方のタンペレにあるというのは、私たち日本人から見れば多少意外な気がするが、タンペレがフィンランドにおける近代工業発祥の地であり、労働運動の伝統もあるということで、ここが選ばれたようだ。

このツアーの後、フィンランドにある労働資料館と労働図書館についてのレクチャーがあった。主な資料館は3つ、図書館が1つあること、このように別れているのは政党系列による違いのためであり、フィンランド労働資料館The Finnish Labour Archives(11人)が社民党系、人民資料館The People's Archives(8人)が共産党系、そして労働組合ナショナルセンターによって設立された労働組合資料館The Trade Union Archives(2人)に別れていることが説明された。この他に、労働運動図書館The Library of the Labour Movement(6人)もあるわけだ(カッコ内の数字は、スタッフの数)。

これに比べれば、日本の状況は貧しい限りだと言わざるを得ない。このような形で一般に公開されている労働組合資料館は日本には一つもない。日本労働資料館や労働運動図書館というような施設は存在していないからだ。ここに大きな特徴、というより問題があると言えるだろう。

大原社研が多少このような施設に近いと言えるかもしれない。労働関係資料の保存と公開という点で、大原社研はこのような欠落を埋める役割を担ってきた。しかし、本来それは運動の側で取り組むべき課題だったのではないだろうか。

逆に言えば、そのような欠落があるからこそ、それを補ってきた大原社研の役割と存在意義は大きいということになる。日本において、大原社研が担っており、今後も果たすべき役割の大きさを、改めて実感させられた次第である。

このように、アメリカやフィンランドでの状

況を見れば、これらの国々と日本とでは資料の保存と公開について大きな違いがあることが分かる。日本の運動が資料の系統的な収集・保存や公開・展示にあまり関心を示さないのは何故なのだろうか。大きな「謎」である。

### IALHIの総会

この同じ会場で、コーヒーブレイクを挟んで、IALHIの総会が開かれた。ここは以前、紡績工場だったところを再利用したのだそうだ。煉瓦の壁がかすかにその面影を伝えている。

朝、来たときに挨拶された人が議長席に着いた。会長さんだったわけだ。知らなかった。新しい会長についての選挙の経過と結果が紹介され、これまでの活動についての事業報告が行われた。



IALHI総会の会場

新しい会長はスウェーデンの労働文書・資料館の館長で、カーリン・エングルンドKarlin Englundという女性の方だ。これからスウェーデンを訪問するというので、後で紹介していただき、私の訪問についてお願いした。

近くのレストランでの昼食を挟んで議事は続き、各地の労働資料館や博物館からの活動報告などがなされた。この中では、写真、ポスター、ビデオなどのビジュアル的な資料、CDによる労働歌の収録などのオーディオ関連資料の重要性が指摘された。見たり聞いたりできる資料が、

ますます重要になっているということのようだ。しかもこれらは電子化され、インターネットで公開されてきている。

大原社研でも戦前・戦後のポスターをウェブ上で公開しているが、これなどは先進的な試みだと言えるだろう。アムステルダムから来た国際社会史研究所のスタッフなど、この大会の参加者の中でもこのポスター展を目にした人がいて、大変高く評価してくれた。

ただ、これらのプレゼンテーションの中で、一つだけ気になったものがあった。それはスイスからの活動の紹介の中で、例としておかしなビデオが上映されたからだ。「おかしな」というのは、顔を隠した学生らしいグループがビルにペンキで色を塗り、スプレーでスローガンを書いているところを写したものだ。このような「集団的落書き」は「運動」についてのビデオなのだろうか。

私は、このような顔を隠して行われる反社会的行動を「社会運動」とは認めない。確かに、政治的自由などが保障されていず、厳しい政治的・社会的条件のもとでの活動ではこのような例もあるかもしれないが、ビデオの舞台はスイスである。

社会運動は幅広い社会的共感を得ることができらなければならない。したがって、異議申し立てをする場合でも、正々堂々で行うべきだろう。顔を隠してやるようなものであってはならないと思う。

社会運動を記録する資料としてのビデオの重要性を指摘するのは正当だろうが、このような一部の跳ね上がった反社会的行動を「運動」として美化するようなやり方には、賛成できない。このプレゼンテーションは誤った選択だったと思う。

この後、この博物館の開館記念のセレモニーが行われた。午前中には準備中だった会場に、

展示が並んでいる。内容は社会主義インターナショナル創立50周年を記念するものだった。



社会主義インター創立50周年記念の展示

### レセプション

これで、本日の日程は全て終了だ。自由時間の後は、会場を移してレセプションになる。私は一旦ホテルに戻り、時間を見計らって会場に向かった。すると途中で「ジン、ジーン」と呼ぶ声が聞こえる。振り返ると、今回の会議を中心になって取り仕切っている中央労働博物館のプロムスターPontus Blomster館長だ。以前、タンペレ大学におられた方だそうだ。

嬉しかった。私の名前を覚えてくださったようだ。プロムスター館長とは昼食の時たまたま隣り合わせ、私の今回の訪問計画について話し、協力をお願いした。スウェーデンのエンゲルンド新会長に紹介してくださったのも、デンマークの労働資料館と労働博物館のスタッフに紹介してくださったのも、この人だった。

ちなみに、昨日お願いしてあったオスロのホテルはあっさり決まった。午前中に、ホテルの場所と連絡先を書いたメモを渡され、「駅からは歩いて5分くらいですよ」と言われた。これは助かる。

さて、レセプションの会場に着いてから、会場の名称である「Museum Centre Vapriikki<sup>(4)</sup>」という名前の「Vapriikki」の意味について聞いて

た。「工場factory」という意味なのだそうだ。ここはかつて金属機械工場だったそうで、その建物を再利用して博物館にしたものだ。

こちらでは、このように古い建物を残し、その内部を改装して全く新しいものにしてしまうということが良くある。中には、産業機械や船、バスなども展示されている。かなりの広さだ。タンペレ周辺の産業についての展示だそうで、明日、この中を案内してもらえると。

会場への入り口で、緑色の飲み物を渡された。カクテルみたいだ。「アルコールですか？」と聞いたら、「そうだ」という。ちょっと考えたが、腰の調子も大分良くなってきたので、一杯いただいた。

なかなか良い味だ。「中身は何ですか」と聞いたら、「この博物館のオリジナルです」としか答えない。「ベースはウオッカでしょう？」と聞いても、「秘密です」と言って笑っている。カクテルが大分効いてきたようで、この後も色々な方と話をした。

その中の一人は、昨日会ったマンチェスターのTUC付属図書館のスタッフである。彼のメール・アドレスを聞いたので、イギリスでの訪問について便宜を図ってもらえそうだ。「労働党の政治家に会いたくないか」と聞くので、「トニー・ブレアに会いたい」と答えた。「それは無理だよ。彼は忙しい」

カクテルのお代わりをもらって振り返ったら、会場の隅に一人で立って外を眺めている人が目に入った。酔った勢いで声をかけた。ロシアからの方だという。

ロシア政治史国立博物館というのだろうか？ いただいた名刺には、「State Museum of political history of Russia」と書いてあった。サンクトペテルブルグにあるのだそうだ。かつてのレニングラードである。

一人ポツンと離れていたのは、ロシア語のできる人がほとんどいなかったからだ。あまり上手くない英語を話すもの同士で親しみを感じた。ロシアに行ったことはないこと、サンクトペテルブルグに是非行ってみたいことを話し、「もし行けたら、冬宮とエルミタージュ博物館と、それにももちろんあなたの博物館に行きたい」と言ったら、大変喜ばれた。

そして、「State」というからには、資金は全て国から出ているのかと聞いた。「そうだ」という答えだ。「十分ですか？」「ロシアの博物館で、資金が十分な所は一つもありません」「そうですね」

そろそろお開きのようで、参加者が三々五々引き上げていく。私たちも出口に向かった。午後8時を回っていたが、さすがに「白夜の国」フィンランドである。まだ日は暮れず、久しぶりに出た太陽を眺めながらホテルに引き上げた。緑の多い、川縁の遊歩道だ。

腰の痛みはかなり和らぎ、ほろ酔い気分を楽しむ余裕も出てきた。アメリカからヨーロッパに渡ってきて、初めて雨の降らなかった一日である。今日と同じように、明日もまた明るい陽が昇ると良いんだが……。

(以下、続く)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授)

---

(4) この名称は、「博物館センター・工場」とでもいうのだろうか。この施設については、<http://www.tampere.fi/vaptikki/frontpage.shtml>という英語版ウェブサイトがある。